



E. SHIBUSAWA

## 「逆境を乗り越えるための渋沢栄一の教え」

text：渋澤 健

### 第①回 投資はただの勝ち負けにあらず

貯

蓄から投資へ」。長年繰り返されている掛け声ですが、1980年代のバブル崩壊後から約30年、日本では守りスタンスが根付き、一般個人が現預金を抱え込んでいる現状が続いています。日本銀行資金循環統計(速報2023年第1四半期)によると、家計の金融資産全体に当たる2,043兆円の内、現預金残高は1,107兆円で、過半数以上の54%を占めます。株式等11%、投資信託4%をはるかに上回ります。

ちなみに、米国の家計の金融資産残高の構成は現預金14%、株式等40%、投資信託13%。ユーロエリアは同34%、同20%、同10%です。G7諸国の家計と比較しても、圧倒的に守り資産が多く、成長性資金が少ないことが日本の特徴です。

確かに、日本は台風や地震など自然災害の逆境が多い地域から生じた社会文

化なので、守りは徳と思われがちです。ただ最近のニュースを見るだけでも、自然災害は欧米でも起こることは一目瞭然。過去10年、20年、30年の日本人の守りスタンスで得たことは、元本保証の安心感と、ほぼゼロ%相当の金利収入であり、失ったのは成長から得られたはずの機会収入です。

この現状に加え、近年の円安で日本人はさらに相対的に貧乏になり、守りスタンスにより自ら苦境に陥ってしまいました。日本人の理財への慣習を高めることは現在の急務ですが、渋沢栄一は100年以上前から以下の考えを示していました。

**「真に理財に長ずる人は、よく集むると同時によく散ずるようであってはならぬ。」**

**(「論語と算盤」・よく集めよく散ぜよ)**

政府は6月に発表した骨太方針の重



逆境の時こそ、力を尽くす

要事項として、「資産運用立国」を明記しました。2024年からNISAという税優遇制度を改正し、現預金に滞留している個人資産を成長投資につなげる新たな流れを促進しています。この資金の新しい流れで企業成長を促し、その成長の果実から家計が恩恵を受けるといふ、まさに「成長と分配の好循環」を実現する経済社会が資産運用立国です。

ただし、資産運用の「当たり前」という土台がしっかりしていなければ、高度化するほど不安定になり、「立国」を築くことができません。まず不可欠なことは、資産運用の最も重要な土台である、リスク(不確実性)とリターン(収益性)の関係性を考えることです。

ほとんどの場合、リターンは要求するけれども価格変動リスクは取りたくない。日本人がまず元本保証の呪縛から解かれなければ、日本の資産運用での立国

はあり得ません。また、リターンへの欲望はあるけれども、時間的リスクは取りたくない。長期投資を実施しているお隣さんの運用実績に目がくらみ、短期的に利益を得るための投資にお金をつぎ込むことで良い思いをするわけがありません。

投資者が投資を「勝ち・負け」というレンズでしか見ていないのでは、資産運用立国の実現は不可能です。それは渋沢の言葉が示唆しています。

**「ただ成功とか失敗とかいうことのみを眼中に置いて、それよりももっと大切な天地間の道理を見ていない。彼らは実質を生命とすることができないで、糟粕に等しい金銭財宝を主としているのである。」**

**(「論語と算盤」・成敗は身に残る糟粕)**

投資における“もっと大切な道理”とは、「価格」の上下を追うことではなく、企業の「価値」創造の伴走です。ご自身、ご家族、そして社員個人の資産運用を、毎月少額の積み立て投資からでも促すことが社会全体の価値へとつながります。中小企業の経営者として重要な責務ではないでしょうか。